

駒つなぎの桜ガイド

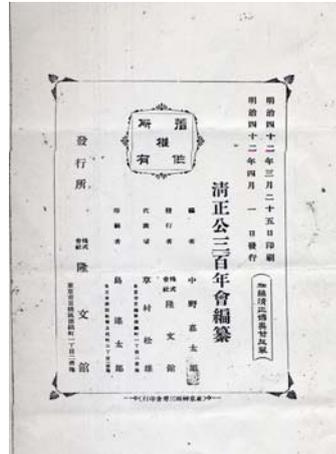
1 駒つなぎの桜の由来

松本城天守が竣工したとき江戸から加藤清正公が城見舞（城の完成祝い）に立ち寄った。その際、松本城主石川玄蕃守康長は清正公をもてなし、清正公が帰られる朝、2頭の馬を引き出して「私どもが選りすぐった馬でございます、どちらか一頭お取下さい」といった。すると清正公は「あなたほどの目利きを選んだ馬をどうして私如きが選べまじょうか2頭とも頂いてまいります」と2頭とも貰い受けて帰国された。これを聞いた人々はさすが清正公と感心したということです。この2頭の馬をつないだ桜が駒つなぎの桜として語り継がれています。



2 「加藤清正伝」にみる駒つなぎの桜

このエピソードの出典は明治42年に発刊された清正公三百年会編纂の「加藤清正伝」です。



原文を読み下し文にしました。加藤清正の相手に対する深い思慮を感じます。

「石川玄蕃頭より馬申し請けられ候事」

江戸より東山道を帰国あるとき、信州の松本の城主石川玄蕃頭（康長）へ見舞いとして立ち寄りたもうに、玄蕃頭、色々様々の馳走ありて、清正帰らるる朝に、駒を二疋引き出して、玄蕃頭仰せられけるは、この駒われら目利きにて調べ置きたるが、当所において近年になき出来物なり、御目利きありてこの中にて一疋お取そうらえとのたまえば、清正のたもうは、さてさて、御志の程、過分至極に候。しからば、御目利きをもって取り立てられ

たる駒をわれら目利きにて申し請くるは、みにくきことあり、子細はもし劣たる駒を申し請くればわれら見利きが下手になり申すべく候、

また、勝^{まさり}たるを取り申せば、なんとやらん、よりくずを残し置くに似候て、大事の駒に疵^{きず}がつき申し候、とかくより申す事はなりがたきことなり。かように候て申し請けねば御志を破り候て、大きな^{りよがい}慮外なり。ただ二疋ながら申し請くるが目利きの仕様に^あるべきとて、二つながら取^{くだ}られ候を、諸人聞きて、さてさて、これ程よき御客^{おきやく}ぶりは、あるまじきとほめ申し候なり。

加藤清正が2頭を引いてってしまったのは相手を立て、馬の見立てについて自らも疵^{きず}かず両方が立つ配慮であったからだと述べています。康長が選びぬいた2頭の馬の内、もし劣るほうの馬を選らんだとすれば私の馬を見る目がたいしたことはないと相手に見抜かれてしまう。また、優れた方を選べば残された1疋は「くず」と烙印を押したことになる。馬が疵^{きず}物になってしまふし、相手の馬選びの力にも疵^{きず}をつけることにもなる。かといって馬はいらぬといえ大變失礼に当たる。だから馬選びをする方法としては二疋両方を引きで物として頂くのが最良と帰国された。

3 現駒つなぎの桜は4本の株が大きくなり1本桜になった

この資料が見つかったのは昭和53年10月25日のことで当時の新聞は石川家に仕えた家臣の子孫が伝えて来た駒繫ぎの桜伝説を聞いた郷土史家達が松本市立図書館を10日程調べて明治42年東京隆文堂発刊の「加藤清正伝」をみつけ伝承を文献がうら付けたとされた。

昭和30年代本丸庭園整備にともない植えられた駒つなぎの桜はこの写真では4本あったように見える。



清正公が二頭の馬をつないだ桜は現在の駒つなぎの桜の位置よりもっと西側と推定されている。「本丸御殿図」によれば本丸北側には内馬場^{うちばば}があり、本丸御殿北西隅に馬見所があった。「年数をへて桜の樹齡が尽き、およそ本丸御殿馬見所のあったあたりに二代目の桜を植え加藤清正公駒つなぎの桜とし、その伝承を継承した。」と地方史研究家故原嘉藤氏は述べている。初代の桜がどこに、いつまであったかは定かでないが「東筑摩郡・松本市・塩尻市誌 現代下」は城内に清正が駒をつないだ枝垂桜^{しだれざくら}が大正初年まで巨木として残り御殿^{ごてん}桜とも呼ばれたと記している。※本丸御殿図は（「歴史のなかの松本城」27pにあり）